

# 本と生きがい

教養部教授 石垣 堅 二

わたしは常々漱石の作品は、学生が必ず読まなければならない、つまりくぐらなければならない〈青春の門〉であると考えまして、学生諸君によく話します。また、本は特に文学書は〈活字(記号)の芸術〉でありまして、見て読んで楽しむべきものでなければならないと思っておりますし、その楽しみの中に本から人生を、人間を、愛を、生を、死を、教えられるものと今も信じて本を読んでいる次第です。上記の題は、わたしなりのささやかな読書の人生から感じとったものでして、本の中に〈生きがい〉を見出すことができれば、その人その人の〈幸福〉もその中に見出すことができるのではと思いましたがこのような副題となりました。

◇ ◇

わたし自身の学生時代の経験で恐縮ですが、昭和20年代の下宿生活は経済的にきびしいもので、あまり余裕がなく古本屋を歩きまわったのが、せめてもの慰めでして裏表紙に記入された高い値段の数字を横眼で見ながら、そしてため息をつきながら立ち読みした思い出だけが今も鮮明によみがえってきます。たまたま卒論の参考文献を探していた時、〈時と永遠〉という詩的な題名の文字が眼にとびこんできて、その文字のとりことなり、いつか自分のものになりたいとよくその古本屋に足を運んだものでした。その本は波多野精一全集の中の一冊で哲学書でしたが、自分のものになった時は雲の上を歩くような気持で意気揚々と下宿へ帰ったものです。その頃、哲学書はわたしにとっては〈青春の門〉でした。

学生時代に読んだ本に、国民文学としての金字塔をうちたてた吉川文学の「宮本武蔵」は学生時代であっただけに、「地の巻」の中の「光明蔵」の三章はわたしに希望や励ましを与えてくれています、感動したことをおぼえています。以下の文章がその一節です。――

この書物は、すべて、藩の文庫から借用したものである。彼が沢庵から幽閉を申しつかつて、この天守閣(白鷺城)の一室へ入れられた時、

沢庵は、「書物はいくらでも見よ。古の名僧は、大蔵へ入って万卷を読み、そこを出るたびに、少しずつ心の眼をひらいたという。おぬしもこの暗黒の一室を、母の胎内と思い、生れ出る支度をしておくがよい。肉眼で見れば、ここはただ暗い開かずの間だが、よく見よ、よく思え、ここには和漢のあらゆる聖賢が文化へささげた光明が詰っている。ここを暗黒蔵として住むのも、光明蔵として暮らすのも、ただおぬしの心にある」と、諭した。そして沢庵は去ったのである。以来、もう幾星霜か。――

武蔵にとって本から学ぶことは、師から学ぶことであり、又、剣と同じく修行でもあり、この時期を沢庵から与えられたればこそ〈剣聖〉と言われる所以で、武蔵同様に若かったわたしの中に、この一節は強い感銘を与えてくれました。素晴らしい良書に出会ったと心から感謝しました。近代化された大学の中央図書館に出入りする学生諸君の姿に接し、この一節から、武蔵の姿と重ね合わせて想像してみるのですが、時代は変わっても若者達の心の中に同じ人間としての向学の精神を見出すことができるとその可能性を信じたくくなりますのも不自然ではないと思います。

わたくしがこれまで読んだ本の中で感銘を受け、今も時折り学生諸君に話したり、レポートに引用したりしまして座右の書として、〈精神的糧〉としての本を挙げるならば以下のような本です。――

○神谷美恵子著「生きがいについて」

○V.フランク著「夜と霧」(霜山徳爾訳)

○アレキス・カレル著「人間―この未知なるもの」(桜沢如一訳)

上記の三冊はわたしとしてもう一度読みたいと思っているのが記載の理由です。

著者の林繁之氏は安岡正篤先生の言葉を次のように記されています。※――

「〈宗教の本質〉は〈献身の情〉である。」

この言葉が、上記の三冊の書物の中に一貫してつらぬかれているのです。そして安岡先生は

同時に「人間が人間であるかぎり宗教はなくなる。」とも答えられているのですが、科学万能の現代を救済するのは、政治でも、経済でもなく宗教しかあり得ないのではないのでしょうか。

わたしは常に上記のように考えるのですが、臨済宗の松原泰道師は、「自分が自分になってゆくには、失敗しなければなりません。悲しまなければなりません。苦しまなければなりません。」と含蓄のある言葉を述べられています。この「自分が自分になってゆく」この言葉こそ、学生諸君が学問に励み、本を読む学生としての基本姿勢を言っているのではないのでしょうか。まさしく〈生きがい〉に値する素晴らしい意味を表現していると信じます。

評論家であり、国際的に海外で活躍されている犬養道子女史は〈趣味〉(“hobby”)について次のように定義されています。「それをする事によって、自分が自分となってゆく、自分の中の最もよいものが——才能や心情や知識や知識欲や精神が——最もよく引き出されてゆく、そういうことがはじめて“hobby”の名に値する。」と。要するに、この“hobby”の中に個性を発見し、自分をたかめるよりゆたかな習慣を身につける生活様式の一つに〈本を読む〉営為こそがその名に値する最もふさわしい姿ではないでしょうか。「自分が自分になってゆく」生き方こそ、〈生きがい〉を与えてくれる聖なるそして倫理観に基いた人間的な〈真善美の世界〉を見出すことができると確信します。

たまたま、S・ネイフとG・W・スミス共著の、「ユリシーズ・シンドローム」(小此木啓吾訳)の本を最近読みましたのですが、この本の〈エピローグ〉の一節をこの拙文の結びとして引用したいと思います。——

「われわれの多くは、人生で真に意味あるものは人とのつながりであると悟ることが遅すぎる。ノーベル賞を授与されたり、科学上の大成果をあげたり、大傑作を書いたり、偉大な美術品を創作したり、記録を打ち立て不威の業績を残すのは、ほんの一握りの人々にすぎないはずだ。

大多数の人々にとっては、人生の収穫は、自分の知り合う人々であり、とくに自分の愛する人々なのだ。愛されないことは悲劇的である。しかし愛されないのはそれ以上に破滅的である。」

この上記の文の中には、〈生きがい〉についてや、〈幸福〉についても語られているように思います。そしてわたしなりに、〈自分の知り合う人々〉を〈自分の知り合う本〉に又、〈自分の愛する人々〉を〈自分の愛する本〉と改めて読まれますと、人生の収穫もこの文と同じ意味を理解できると信じます。

再度、酒井伝六著の「ピグミーの世界」(朝日選書71)の一節を結びに附記することを許して戴けますならば、アフリカのザイル共和国の赤道直下に在るイツーリの森に住むピグミー族の生態を克明に記録した著者は、この未開社会の自然の中に生きる種族の心性の品格の高潔さを讃えて—「まことに、大地に求愛する者の、〈柔和〉と〈謙虚〉と〈節度〉とが、彼等に存する。」と述べていますが、私なりに〈柔和〉は、〈愛〉であり〈謙虚〉は〈畏敬の心〉であり、〈節度〉は〈(自己)抑制〉であると解釈したいのです。この種族はこれらの〈心性〉を自然から学びとったことに注目すべきです。このような〈心性〉をこの種族から見習って文明社会に生きる学生諸君は、本を読み本から学びとって戴きたいのです。そして、そのような営為こそが本を読む〈目的〉であり〈意義〉であるのです。輝かしい希望に満ちた青春の門は、かくして諸君の前に開かれるのです。

※林 繁之著「安岡正篤先生隨行録」竹井出版  
以上

